
心のトピラ

みやお

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

心のトビラ

【ZPDF】

Z3496R

【作者名】

みやお

【あらすじ】

前の学校ではケンカばかりして、周りに恐れられていた羅夢。

羅夢のホントの心は…？

前書き（前書き）

ちゅうと、残酷かも…

前書き

？？？「フフフ…ハハハ…アハハハハ」

？？？「ねえ、どうしたの？フフフ」

？？？「早く、立ちなよ～ねえ」

？？？「フフフ…ぱいぱい」

？？？「アハハハハ」

だんだん少女の声が遠くなつていく

彼女の名前は赤阪羅夢。あかさかじむ

学校一の変人。そしてケンカ、いや暴力好きな16歳だ。

彼女にスポーツをやらせれば、必ずトップに立つ。

何故、彼女がこんなにも運動神経に優れているのかは分からない。

そして、彼女にはかなりの力もある。

そんな彼女に一発でも殴られた奴は必ずしも病院行きになる。とう噂までたっている

だから、彼女に歯向かう奴はない。

彼女は転校した。

彼女が、自分の暴力を封印したのだ。

誰かが歯向かうわけでもない。

だが、ここでは違う。

そこで、彼女は一切周りに暴力を振るわないつもりだった。

ある男が来るまでは。

普通の女の中（前書き）

ク=クラスメイト

羅=羅夢

先=先生（担任）

普通の女の方

ク「よろしくねー赤坂さん。」

羅「いりうさん」

ク「赤坂さんの、前の学校ってどんな学校だったの?」

羅「普通だったよ。」

(ケンカ事実だけは、知られたくない。)

そして、友達もいっぱい出来た

羅夢は意外と早く、クラスに馴染めた

羅夢の致命傷とも言える、暴力は振るわずに。

だが、たまに骨がウズウズしてたまらない時もあった

そこをなんとかガマンして、約1年が過ぎた。

大分、骨がウズウズする事も減ってきた。

そう。あの男が来るまでは

スマつとした、顔立ちの整っている男の子が入ってきた

先「転校生を紹介するぞ——」

羅夢は驚きを隠せない

？？？「大村瑞生おおむらみずきです。よろしくお願ひします。」

たちまち瑞生は人氣者になつた。

それに対して、羅夢はどんどん物静かになつていった。

タイマン……！？

ク「そ、うい、え、ば、大、村、君、が、転、校、し、て、か、ら、だ、よ、ね、え、」

羅「え、つ、何、が、？」

ク「ウ、チ、の、学、校、の、喧、嘩、上、等、の、ヤ、ツ、ら、が、ボ、コ、ボ、コ、に、や、ら、れ、て、い、ぐ、の、…」

(…-…)

ガタ、ン、つ

ク「羅、夢、ど、一、し、た、の、？」

羅「ゴ、メ、ン、一、あ、た、し、氣、分、悪、い、か、ら、早、退、す、る、…」

ク「大丈夫なの?」

羅「うん、ありがとね。瑞海ちゃん」

「待てよーーー！」

羅夢は気にせずクラスを出ようとする羅夢

？？？「待てよーーー待てよーーーが！！赤阪羅夢。」

声がした方を見ると、この前転校してきた瑞生が立っていた。

瑞「赤阪羅夢。中学ん時の蹴つつけよひじゃねえか。」

羅「中学の時の蹴りっ..」

瑞「とぼさんじゅねーーー明日の放課後、タイムマンだ」

クラスがざわめく

羅「しうがないわね… 売られたケンカは買つ主義だから…」

- 次の日

勝負は校庭であつた。
タイマシ

瑞「行くぞーー！」

瑞生の後ろに大量の男たちが付く。

羅「ちょっとーー！タイマンでしょーー！」

（心底卑怯なヤツ…）

瑞「行けーー！」

瑠「もし、羅夢が強いとしても、あんな大人数の相手…！？」

さつきまで威勢がよかつた男たちは一人残らず氣絶していた

瑠「そんな…」

瑞「ほお…1年間、ケンカ何もしてなかつた割には、全然衰えてねえじやねえか」

羅「うつせーんだよ！カンケーないヤツらまで巻き込みよつて…」

ドカツ

ボコッ

ドカッ

瑞「前はケンカ中、ずっと笑つてて気持ち…」

羅「どうがー?」

瑞「お前…1年間で性格も変わっちゃったんだな…」

羅「ちつ きから『トトヤ』『トトヤ』つゝせんだよーー。」

ボカツ

羅夢は無傷だが、瑞生はボコボコだ

突然羅夢が手を止めた。そして

「「」の勝負はあんたの勝ちだ。」

と黙つて帰つていった。

お父ちゃん

ガチャ

羅「ただいまー」

？？？「いりかに来なさい」

（またか…）

羅「なあに？お父ちゃん」

父「今日、久しぶりにやった勝負で負けたそ、つじやないか」ケンカ

（エリから嗅ぎ付けてくれるのよ…）

羅「「メンなや。」

父「なんでもトップを取れと言つてゐるじゃないか！！」

バシツ

羅「つー。」

父「次、1位取れなかつたらタダじゃすまないからな

羅「はー。」

羅夢は自分の部屋へ戻つていった

羅「はあ…どーしたらあんなに早く喫を付けてくれんのかな…」
「か、思いつきし叩いて…」

叩かれた頬を触る

羅「痛つ…」

鏡でみると腫れている

(…でも、あれでよかつたんだ。)

Reason (前書き)

これは、瑞生たちの勝負が終わった次の日の話です

Reason

瑞「ビーウー一つもりだ！？まだ勝負は終わっちゃあこねーよーーー！」

羅「だ・か・ら…大村君の勝ちつて書つてんじゃないですか…」

羅夢はいつも冷静さを取り戻している。

羅「私は負けたんです。ケンカは一度としないと誓ったのに、熱くなりすぎてケンカをしてしまったから…だから、気持ちを抑え切れなかつた私の負けなんです。」

瑞生は返す言葉がなかつた

まだ、クラスメイトはよく分かっていない。

成績優秀で、テストでは満点しか取ったことがなかつた羅夢が、実はハンパなく強すぎた元ヤンだった事に。

瑞生は自分の席に戻つていつた。

それに続いて何人かの女子が付いていく。

（やっぱ、イケメンは喧嘩上等のヤツでも人が集まつてくるんだ～）

と羅夢は思つ。

ク「ねえねえ、瑞生君。」

瑞「あん？」

ク「中学時代の羅夢つて、どんな感じだったの？」

瑞「オレはクラスが違ったからよく分かんねーけど…友達がゆーには、授業中寝てたり、余所見とか、サボってばっかりしてノート取つてないクセに、テストじゅいいつも満点で先行たちが驚いてたらしーぜ。」

ク「へえ…」

（成績の点では変わつてないんだ…）

瑞「だし、誰もアイツに逆らひやつはこなかつたぜ。アイツのパンチ力約200kとかだぜ（：：」

教室中が静まり返る

羅「ちよつとオ！！何へんな事言つてゐるんですか！？私、そんなにパンチ力、強くありませんから。」

二つの間にか、羅夢と瑞生は和解していくようだ。

？？？「へえ…あの「、意外と出来そうね」

私のせい

ガラフ

いかにも怖そな女子2人組みがやつて来た

？？？「赤阪羅夢ーー！」

ガシャ

羅夢の机を蹴り飛ばす

？？？「ケンカ、やるーぜーー！」

羅「イヤです。」

？？？「あん？年上に向かつて何書つてんだよー。？」

羅「いくら先輩だろ？」「ケンカはしませんー。」

ボコッ

？？？「調子こじらじやねーよー。」

瑠「羅摩ーー。」

羅「いいの。これは私の問題。」

??.??.「負けるのが怖くて向も出来ないとか……！？」

??.??.「うわ～ダッヤー！」

瑠「やめーー。『マイナビがな』弱くねーー。」

瑞「コイツは一度とケンカしないって決めてるんだ。そんなにケンカがしたいなら、オレが相手になつてやる」

羅「やめて……これはあなたが関わることじゃない……」

瑞「イヤ、イヤうちは一歩黙つとナ」

「……」「威勢の良さだけは認めてやる。負けても後悔すんな……」

？？？「来い！…」

そつと、瑞生は連れて行かれた

羅「私のせい…私のせい…」

次の日案の定、瑞生はボコボコになつて登校した

羅「ゴメン……私のせい……瑞生は関係ないのに……」

瑞「もう、いいから謝るなつて……」

そつやつて、ビーンーー言い合つてゐるウチに、昨日の二人組みがまたやつて來た

？？？「赤阪羅夢やんよお」

？？？？「トイシジヤ弱くて相手になんねーんだけど…」

瑞「オイ…弱いってなんだ！？弱いって！」

？？？「雑魚は黙つとけー！」

(これ以上周りに迷惑はかけたくない…)

羅「わーつたよ。行きやあいーんだろ？」

瑞 「お前……何考えてるんだよ」

「……」「さぬ気になつたか……来い！」

羅夢はある倉庫に連れて行かれた

？？？「總長……」

總長「今日は、連れて來たか？」

総「昨日はあんな男連れてきやがって…」

総「やれ…！」

羅夢に向かつて大勢のヤンキー（女）たちが向かつてきた。

（こんな大勢相手じゃ… 瑞生も）

瑞生の大量の手下共と戦つたとき同様に10秒程度で20人近くのヤンキーたちを気絶させた

「あんた、やるなー。ウチに入らねーか?」

羅「イヤです!」

羅「残るはあんただけ」アハハ

羅「あんたの手下、みんな氣絶してる。フフフ、ハハハ

「氣持ちわづこせねじやがつて！死ね——」

「アーッ！」

ボコッ

素早く交わし、総長の顔面にパンチ一発。

もの凄い形相で走つてくる総長にカウンター キックを一発。

羅「どーしたのー? もー終わりなの?」

羅「ぱいぱい」

フフフ

アハハハハ

羅夢は不気味な笑いを残して立ち去った

瑞「昨日、オレが連れて行かれた所は倉庫だった。」

瑞「そこには大量の女共がいて、オレはそこいらにボコボコにされ
たんだ。」

ク「じゃあ、羅夢は……」

瑞「いや、そんなことない。」

瑠「ううん、そんな事が言えるのよー。」

瑞「オレと羅夢が戦つたとき、羅夢は本氣で勝負してなかつたんだよ。」

ク「えつーー？」

瑞「一発でも本氣で殴られたら、”病院行き”って言われてんだよ。」

「…」

ク「病院行き……」

瑞「だが、オレは病院に行かなかつた。」

クラスメイトたちも理解したようだ。

狂ひ歯車（後書き）

羅夢ちやん… 狂いました

”ケンカ” の時だけ… ですよ？

ガチャ

父「お帰… つて羅夢… お前またケンカをしたのか…？」

羅夢がケンカで狂っている事を瞬時に判断する。

さすが父親なのだろう

羅夢は無視して部屋へ行く。

トントン

父「はこねーーー」

ガチャ

羅夢はベットの上で足をぶらつかせている

父「ケンカはやめろと言つたじゃないか！！」

羅「ホラ。やつぱり。」

父「はあ？」

羅「この前、あたしがケンカをやつた時、”1位”をとれって言ったよね？」

羅「じゃあ、どうして今はやめられて言ひのへお父さん、いい加減にしてよー。」

父「なつ」

羅「ケンカを教えたのもお父さん。」

羅「ケンカをやめろって言つたのもお父さん。言つてる事が矛盾してるよ！…だし、あたしはもう、ケンカしたくないの…！無意味に人を傷つけるだけで、虚しいだけじゃない…！」

羅夢は深呼吸してから

羅「とにかく、ケンカの事でお父さんは口出ししないで…。」

と黙って壁を覗いてしまった。

まるで自分の心のドアを覗かれてよいひし...
元

（なんか、言いたいことを黙つたらスッキリした。）

心のアート（後書き）

次、最終回です

羅夢の心はスッキリしても、ラストの後味がスッキリしないかも…

恋の願い

羅「お父さん、まだやじこむんでしょ？」

父「…」

羅夢は扉を背もたれにして座つた

羅「あのね、私にとつて勉強のトップはもう慣れたから気にしない。でも、ケンカは誰も喜ばない。」

羅夢は一息いれてから

羅「死んだお母さん、あたしがケンカでトップをとつて、喜ぶと田

「うへ

父「…」

羅「お母さんね、小れい頃のあたしによく、うつむいてたの。」

「パパはケンカがとつても強いの。でも、それはホントのパパじゃないの。」

「ホントのパパはね、とっても優しいの、ケンカと回じょうひ。」

「ママ、1回パパに助けて貰つたコトがあるの。」

「男の人たちに囲まれて、お金を取りられそうになつたの。そこでお父さんがやつて来て、助けてくれた。それからママとパパは付き合つて、結婚した。」

羅「お母さんはね。お父さんにホントの自分、優しいお父さんに戻つて欲しいの!!」

父「わっ…分かった」

羅「あたしのこの強さは、人を助ける為に使う。だから、さつきも言つたけど、ケンカの事に關しては口出ししないでね。」

羅「お母さんの想い、踏みにじらないようにケンカはしない。でも、助けを求める人がいたら、ケンカをしてでも助ける。」

羅「ヤダつあ……お父さん、泣いてんの！？」

父「もうゆうお前にそ泣いてんじやねえか。」

羅「泣いてない！！」

二人は泣いて、笑った。

初めて打ち解けあえた。

ぬの願い（後書き）

なんか、へんなまともり方、…

とつあえず、ありがと「いやがこ」ました

みやお

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3496r/>

心のトビラ

2011年10月8日19時12分発行